

エックハルトにおける esse の問題

—Exod. 3, 14『在りて在る者』解釈を中心として—

大 森 正 樹

I

1. 一般的にマイスター・エックハルトの著作を読む場合の困難さは、彼の用いる言葉の真の意味が何であるか、それを我々が把え難いという点にある。その為に種々異なった解釈が存在し、それによって生じる誤解もまた甚しい。ここで取扱おうとする esse の問題にしても様々の考え方がある。思うにその原因の一端はエックハルト自身にある、つまり彼は esse を一様な面から眺めるのではなく、色々な局面に応じた esse の把え方をしているのである。従ってここではその一つの例として、『出エジプト記』における Ego sum qui sum をどのように考えているかを彼の『⁽¹⁾註解』に即して検討してみようと思う。

2. 『出エジプト記』第3章14節には、モーゼが神にその名を問うた時、神が答えて『我は在りて在る者なり』Ego sum qui sum と言われたと記されている。エックハルトは彼の『出エジプト記註解』の14節から21節に亙ってこれについて解釈を施している。

エックハルトはこれを五つの観点から解釈する。その第一⁽²⁾は ego, sum, qui, sum という四つの語のそれぞれについて文法的観点から解釈しようとするのであり、その結果はこれらの言葉の何れもが神に最も固有の語であり、神に用いるに最も相応しいということになる。つまりまず最初の『我』ego は第一人称の代名詞であり、これは「彼でもあなたでもない、他ならぬこの私が」という意味で discretivum pronomen と⁽³⁾言われ、当のものを他の一切のものから区別し、他を除外し、附帯性等を伴わないで純粋な実体 mera substantia だけを⁽⁴⁾表示する。それ故この語は附帯性や種や類を越える神にのみ相応しいことである。

更に『ところの者』qui は不定名詞 nomen infinitum ⁽⁵⁾であり、infinitum 即ち無限

immensum ということもまた神にのみ相応しいことである。つまりここで言う qui は quis と関連し、⁽⁶⁾ quis は nomen infinitum であり、その infinitum という言葉の持つ意味から無限さと関係づけられている。そして後で述べる第四の観点に至ってこの quis (=qui) が更にメタフィジカルに解されていると思われる。

また『ある』sum はプリスキアヌスによれば「実体詞」verbum substantivum と呼ばれる。この術語を聖書的に解せば、Verbum ということは「御言は神であった」⁽⁸⁾に見出され、substantivum は『ヘブル書』に「神の光栄の輝き、神の実体の形である御子は、云々……」の中で substantia という言葉が見出される故、この二つの言葉は聖書の中で神について用いられたことがわかる。従って、この sum も神にのみ相応しい言葉であると考えられる。

要するに Ego sum qui sum という言葉は文法的観点よりまず見るなら、神に最も相応しいものであり、神が自らをその最も固有の仕方であらわそうとすればこれ以外には考えられないと言っているのである。

3. 第二は⁽¹⁰⁾いわば論理的な観点であって、今これを ego sum という命題にのみ限定し、更にその中でも特に sum に力点を置く。つまり「我はある」ego sum と言う時、この sum は命題の述語であり、命題において第二の要素としてそこにある secundum adiacens。⁽¹¹⁾ その場合ここで意味されていることは、主語において、また主語についてそれが純粋な esse であること、また露な esse であり、この純粋な esse が主語そのものであるということなのである。つまりこの表現は主語の本質を表わすのであり、ego なる主語は純粋な esse であって、しかもそれが本質なのである。換言するなら essentia と esse が同一であることを表わすのである。「我は essentia と esse が同一なる者である」とは神が自らを指して語られたことの内容である。被造物はこのように essentia と esse が同一であるとは考えられないから、これもまた神にのみ相応しいことなのであるが、⁽¹²⁾アヴィケンナが神の quiditas sive quidditas はその anitas であると言っていることもこの考えを支持するものとエックハルトは受け取る。そして更に後で触れる第五の観点においては、かように essentia と esse が同一なるものは必然的な esse でなければならないとして、他の一切のものに依らずして esse するという特質を神に帰せしめている。

4. 第三は⁽¹³⁾ sum qui sum と sum が二度繰返されたことを問題とする。二度 sum

を繰返すことは神からあらゆる否定を除外して肯定の純粹さ *puritas affirmationis* ⁽¹⁴⁾ を示すことである。「純粹さ」*puritas* という言葉はエックハルトがよく使うものであるが、ここで言う「肯定の純粹さ」とはどういう意味であろうか。先にあらゆる否定を除外すると言われていたように、神にあっては「ない」ということはあり得ない。つまり「神が知らない」とか「神が出来ない」ということはあり得ない。逆に我々被造物にとっては我々の認識能力を神の本質が超え出るが故に、「神の何であるか」は我々に知り得ず、せいぜい「何でないか」を知り得るのみであるといった否定神学が有効である。しかし神は知恵、能力、意志などすべての完全性の根源であるから、神に否定を適用することは神を否定することに繋がる。それ故神のうちに身を置いて考えるなら、神からは一切の否定が除外され、すべて肯定的に語らねばならない。というよりはむしろそこでは一切の否定を交じえない肯定の極みである、肯定の純粹さしか存しないとすべきなのである。

更にまたこの二度の繰返しは *esse* そのものが自己自身へそしてまた自己自身の上へ一種の転回 *reflexiva conversio* を行うことであり、自己自身のうちに堅く留ることである。それはまた一種の自己内における燃焼であり、沸騰であり、自らを産み出すことでもある。⁽¹⁵⁾ それはまた一種の内的生命であって、自己の外へ燃え立ち迸り出る以前に、それ自身の中において自己のありとあらゆる部分にまで浸透しつづけている内なる生命なのである。

この場合、自己自身を目指して転回するという言葉の着想は、*sum* が繰返されて元へ戻っているということに由来するのであろうが、しかしまたプロクロス『神学綱要』や『原因論』の影響を受けているとも言われている。⁽¹⁶⁾ 従ってこのような仕方では *esse* が自己自身へ戻るなら、今度は自己自身のうちにしっかりと根を張るようになる。勿論その場合には完全に自己自身へ立ち戻っていなければならない。そのように立ち戻ることによって自己の内部に湧き立つ充実した生命力の溢れんばかりの燃焼と沸騰を自己のうちにしっかりと保っておかねばならない。力を自己の外へ及ぼすに先立ってはまず自己自身が充実しておらねばならないからである。その状態は生命のエネルギーが内と外との均衡をまさに破らんとする緊張を孕んだものと譬えることが出来よう。恐らくここでエックハルトは三位一体を考えていたのであろう、「そのものにおいては愛乃至熱の輝きが照り返っていた」とすぐ後で言っ

ているからである。そしてそれこそが『ヨハネ伝』(1.4)の「彼のうちに生命があった」と言われるその生命であり、こうした神のペルソナにおける流出 emanatio が創造の根拠であり、創造に先行するものであると言っている。⁽¹⁷⁾

5. 次いでエックハルトはアウグスティヌスが神を bonum bonum とか summum bonum とか言っていることを引用した後に言う。神が「bonum bonum であるということは自己自身へと完全な還帰によって戻りゆき、他のいかなるものにも一切頼ることなく自己自身のうちに堅く留った雑気のない善 bonum であり、最高善であることを意味する。」ところで sum qui sum と sum が二度繰返されてあることは、esse そのものが自己自身へと帰りゆき、そこに堅く留ることであった。それ故このことと先の bonum で示された論法をつき合わせて考えるなら、sum qui sum とは、雑気のない esse であり、またその esse の充満を意味することに他ならない。先にも述べた様に、esse が充満しているが故にその esse は今にも外へ溢れ出んばかりの状態にあるのである。

II

6. 第四はプリスキアヌスの文法に基いて quis について考察する。⁽²¹⁾ それによれば quis はしばしば「名前」について尋ねたり、その他附帯的な事柄を問うたりするものではあるが、quis は本来的には quid と同様に名前や定義の指し示す事物の何性乃至本質を問うものなのである。⁽²²⁾

しかしここで今どうして quis が考察されねばならないのかという問題が生じる。それに対しては二つの答が考えられる。一つは、当面の問題である sum qui sum はモーゼが神にその名を問うた結果の答になっている。従ってモーゼは「あなたの名前は何ですか」と問うたのであるが、その場合プリスキアヌスによれば名を問う時にも、quis の本来の意味を拡張して quis が使われるとされている。従って問掛である quis に対して、その答である sum qui sum が対置され、そうすることによって sum qui sum が実はそれを語る者の本質を露にするものであることが明るみに出され、現在の問題点を搦手から攻めていこうという意図があると考えられる。以上はいわば本来的な答であるが、これに対してもう一つ考えられるのは、やはりこれもプリスキアヌスの文法によれば、quis は疑問代名詞でもあり、不定代名詞で

もあるが、これはまた関係代名詞の qui にも還元されるということである。⁽²³⁾すると sum qui sum の qui とも当然関係を有しているわけで、既に第一の観点において言葉の面から考察された qui を更に第四の観点に至っては quis との関連のもとに、その考えを一步進めたと言ってもよいと思われる。

ところで被造物においては他者に由来する esse と他者に由来しない essentia は別のものである。従って事物の anitas 乃至 esse を問うところの「あるかどうか」という問と、事物の何性乃至本質を問うところの「何であるか」という問とは当然区別してかからねばならない。だから「人間とは何であるか」とか「天使とは何であるか」と尋ねる者に対して、「そうした者は存在するから」「人間はある」とか「天使はある」とか答えることは、「あるかどうか」という問と「何であるか」という問を混同して答えていることになるから愚かしい返答と言わざるを得ない。それに反し神にあってはその antias は quiditas そのものであるから、「神は誰か」「神とは何であるか」と尋ねる者に対して「神はある」と答えるのはまことに適切な返答と言わねばならない。即ち神の esse は quiditas なのである。つまり神である「我」は sum qui sum である。ここで先に quis について考察したことが生きてくる。神は「あなたは誰ですか」と問掛けられて、以上のように自己の本質を、聴く者の眼前に最も適切な仕方で開示したのである。故にこれこそは神が「我は在りて在る者なり」と言われたことの意味である。

7. ⁽²⁴⁾第五はマイモニデスやアヴィケンナ等の説をない交ぜて自説を展開していく所である。

マイモニデスは彼の sum qui sum の註釈⁽²⁵⁾でこれをテトラグラマトン⁽²⁶⁾として考えようとしており、またこの言葉自体はいとも聖なるものであり、他から切り離されたものであり、書かれてはいるが読まれないものであって、これこそ創造主の露で純粋な実体を意味していると考えたいらしい。マイモニデスは sum qui sum について更に次のようにも考えているらしい。つまり最初の sum は事物の本質を意味し、それはまた主語でもある。そして主語とはそれについて何事かが語られるものであるから、名付けられるものである。これに対し第二の乃至繰返された sum は esse を意味し、述語であり、名付けるものである。しかるに一般的には名付けられるものとか命題の主語はそれだけでは不完全なものである。つまり主語 subiectum は

その名の示す通り *sub-iectum* で「基体」でもあり、これは「その基に置かれている」という意味であるから、決してそれ自体で完全なのではない。即ち名付けるものがある初めて名付けられるもの、即ち命題の主語が完成するからである。例えば「彼は善良である」という場合に、彼の本質は善そのものではないから彼の本質はそれ自体で充分なものであるわけではなく、必ず何かそれを完成するものを必要とする。従ってその本質は常に不完全なものである。

8. ところでこのように何か欠けているためにその何かを他から受取ることが必要であるとか、それ自身だけでは充分ではないということ程、神の本質から縁遠いものはない。『原因論』⁽²⁷⁾の言葉を借りるなら、「第一のものはそれ自体で豊かなものである」からである。だから *sum qui sum* と神が言われる時、そこで我々が教えられることは主語たる *sum* は二番目に来る述語の *sum* と同じものであり、名付けられるものが名付けるものであり、*essentia* が *esse* であり、*quiditas* が *anitas* なのであり、*essentia* はそれ自体で充足し、*essentia* が *sufficientia* そのものだということである。

それ故そのものの完成のために自己以外の何ものも要せず、「本質そのものがそれ自体で充足している」ということは神にのみ固有なことである。被造物ではそういうことはない。例えば制作者 *artifex* が仕事を為すに際してはその自然本性 *natura* だけでは充分ではなく、彼の自然本性そのものではない仕事を為そうという意志、能力、知識等々のものがその人に加わらなければ充分とは言えない。だから神が自らを *sum qui sum* と言われる時、その意味するところは神の充足 *sufficientia dei* ということなのである。

マイモニデスは言う、⁽²⁸⁾「テトラグラマトンの最初の二文字は本質の堅固さを意味する。そしてまた〔神を表わす〕『シャッダイ』という言葉は『ダイ』に由来するが、この『ダイ』は充足という意味である」と。

9. 次いで「必然的な *esse*」⁽³⁰⁾という観点を導入する。例えばもし人間の *essentia* が自らの *esse* であるなら、人間は必然的な *esse* ということになろう。そうした必然的な *esse* を持つ者は永遠的な者であろうし、同じものが *non esse* でもあり、且つ必然的な *esse* でもあることは不可能と言わねばならないだろう。しかるに神は自らの *esse* そのものであり、神は「在るところの者」*'qui est'* である。聖書では

sum qui sum と語られた後に、「在るところの者が私を送った」と記されているからである。従って神は必然的な esse である。⁽³¹⁾しかるに esse それ自体はいかなるものも必要としない。なぜならいかなるものも欠けていないからである。しかし万物は esse を必要とする。esse の外は無 nihil だからである。例えば病人には健康が欠けているから、健康が必要のように、無には esse が欠けている。だから最高の完全さのどんなものも欠けていないということは、最も充満した、最も純粋な esse なのである。それが充満した esse であるなら、それはまた「生命に溢れたもの」であり、「知恵あるもの」である。⁽³²⁾実際そのものが自己と万物を十全に満たすものであるなら、そのものは自己と万物の sufficientia である。聖書にも「我々の sufficientia は神から来る」とある通りである。⁽³³⁾神は esse そのものであるから、神には esse が欠けておらず、更にそれ以上 esse を要することもない。神はすべて完全なるものの源である。個々の完全さは本来的に神に依り頼み、神に依存しており、神なくしては無となり、突きつめれば純粋な無へと落ちこんでしまうであろう。『ヨハネ伝』⁽³⁴⁾にも「彼によらずしては何ものもつくられなかった」とあるが、そこで「つくられたもの」とは esse を持ったり、受取ったりするもののものであるが、そうしたものは神の esse そのものがなければ無であるということに他ならない。

10. 従って第五の観点の主眼は神の sufficientia ということであり、更にそこから神が必然的な esse であることを導き出し、次に sum qui sum は神にのみ固有のことであると説明する。即ち神においては essentia と esse は同一なのである。しかし先にも触れたように被造物にあってはそのものが完成する為にはどこまでも他者を必要とする。それが被造物の essentia である。しかし神の essentia は自らの esse であって、神はそれだけで充足している。これが神と被造物とを分つ重要な観点なのである。

しかも神だけが必然的な esse であって、他の一切のものはその存在の必然性を自らの内に持たない。つまり神のこの esse がなければ神以外の一切のものは無であり、一切の被造物はこの esse によって「在らしめ」られている。故に神の esse には最高の完全性が豊かに備わっているが、一方被造的存在は全面的に神に依存している。神なくしては全くの無なのである。それはベルナルドゥスも言うように、⁽³⁵⁾被造物はこの最高の esse に比べればまさに non-esse という他はないのであり、「何

ものも彼によらずしては造られなかったのである。」

III

11. さてこうしてエックハルトのテキストに考察を施した後に、以上でもって我々が知り得た事柄と尚先に残された問題が何であるかを明らかにし、ここに最終的な考察をしてゆかねばならない。

そこで我々が知り得たことは次のようなことになるであろう。即ち、① *sum qui sum* についてエックハルトはこれを文法的、論理的、形而上学的（特に存在論的）見地から論じている。しかしいづれの見地よりしても *sum qui sum* は神の自己表現に最も相応しいものであり、*sum qui sum* の持つ意味はその中核をなす *sum* を *esse* という場に移すことにより、その視野を更に広め且深めたのである。それ故ここで問題とされる *esse* は神の *esse* であり、エックハルトは神に *esse* という言葉が適用される場合、*sum qui sum* という言葉の内包する意味が何であるかをこの聖書の註解を通して論じたのである。

②そうした場合にまず注意すべきは *ego sum* とは *essentia* と *esse* が同一であるということであった。ここにエックハルトは神と被造物とを分つ重要な視点を定める。この視点が出発点でもあり終点でもあるからである。

③次いで *sum qui sum* という *sum* の繰返しは神の内に身を置けば一切の否定の言葉が使えないで、否定という言葉の適用される世界を越えた所に成立する肯定の純粹さではあるが、しかしそれは何よりも躍動する根源的な力を表わすものである。従ってこれは創造の根底である。*esse* が常に自己自身を目指して戻ってくるといふ一つの運動はそれだけで充実しきっており、これは神の内面における一種の燃焼に譬えられる。それはまず三位一体なる神の内に遍く行渡り、緊張を孕み、外部へ溢れ出んと燃えさかる。それこそは愛の熱による創造に先行する状態であり、そのような神における *esse* は何ら不純なものを含まない純粹な *esse* であり、*esse* の充満であると言わねばならない。

④また既に明らかになったように神にあっては *essentia* と *esse* は同一なのであり、この *essentia* はそれ自体で *sufficere* している。神は何ら他者を自らの完成のために必要とすることはない。しかも神が *esse* することもしないことも可能だと

いうのではなく、全く逆に永遠に esse しており、必然的な esse である。ところが被造物は反対にこの esse がいかにかにしても必要であり、この esse がなければ esse し得ないのであり、且この esse に比べれば被造物は無であるとしか言いようがないのである。

12. それでは以上のことよりエックハルトは神の esse がどんなものであると言っているのか。これはしかしそう簡単には答えられない。だが少なくともこれまでの考察から推し測るなら次のように言えよう。つまり神がその名を問われて ego sum qui sum と答えることは神に最も固有な仕方その本質を顕現させることであり、人はそこにおいて essentia と esse が同一であることを洞察する。そしてこの esseこそは神を内側から支え、満たす生命であり、神のペルソナの流出に関与する。しかもこのような神の esse は、エックハルトがここでは明白に述べていないが、万物の根源として、万物を「在らしめる」esse なのである。⁽³⁶⁾

さて以上のように要約出来るが、勿論これで充分ではない。これは神の esse についての考察の端緒というべきものである。しかも無に等しいとされた被造物の esse についてはエックハルトも詳しく論じてはいない。唯その際重要なことは神の esse と被造物の esse との関係であり、更なる考察は神の esse と被造物の esse を根本的に分つ所は何かに向けてなされるべきであり、そうでない限りエックハルトの言う神の esse は汎神論になりかねないからである。⁽³⁷⁾ 更に神と被造物各々においてその essentia と esse の関係についても問われねばならない。こうした問題についてはエックハルトの『創世記註解』や『ヨハネ伝註解』が役立つであろう。

13. ではここに至って、このようにエックハルトが聖書を軸として多くの哲学者や神学者の説を参考としつつ、自説を展開させた意図は一体何であったのか、それを今問うてみよう。エックハルトはほとんどの場合神の中に身を置いて物事を考え、論じている。神の中に身を沈めて、神の偉大さとその反対に被造物の微小さを見る時、それはある意味の驚愕と絶望をエックハルトの魂の中に引き起こしたに違いない。つまり神の esse に比べれば被造物の esse は無に等しいという洞察が魂を根底から揺振るのである。しかし我々の眼から見る時、この無に等しい被造物ですら現実に esse しているではないか（これをエックハルトは疑おうとはしない）。こうした矛盾に逢着した時、いかに神の esse が最も純にして充満したものであると口を極め

て表現しようとも、そこに表現してもし尽せない何かは常に残るであろう。この何かを彼独自の仕方では表現しようとするのが、エックハルトにおける神秘主義の動機であるに違いない。そして神と被造物の間の限りない深淵を垣間見ながら、尚且この両者が何らかの仕方では一致し得るのかどうかという問題こそは、エックハルトの神秘思想において重大な関心事となることであろう。

註

- (1) 使用テキストは Meister Eckhart, Die deutschen und lateinischen Werke, Die lateinischen Werke Bd. II (以下 LW II と略記)。 *Expositio libri Exodi*, n. 14-21; pp. 20-28. Kohlhammer Verlag.
- (2) LW II n. 14-15.
- (3) Cf. Priscianus, *Instit. gram.* の XVII c. 9 n. 56 (ed. M. Hertz).
- (4) *ibid.*, XII c. 3 n. 15: solam enim substantiam, non etiam qualitatem significant pronomina.
- (5) *ibid.*, XIII c. 6 n. 31.
- (6) *ibid.*, XVII c. 5 n. 33: Huic nomini, id est 'quis', quod est interrogativum vel infinitum, redditur 'qui' relativum.
- (7) *ibid.*, VIII c. 10 n. 51.
- (8) 『ヨハネ伝』第1章1節。
- (9) 『ヘブル書』第1章3節。 qui cum sit splendor gloriae, et figura substantiae eius, portansque omnia verbo virtutis suae,.....
- (10) LW II n. 15.
- (11) cf. Thomas Aquinas, *In II Perihermeneias*, lect. 2. Aristoteles, *Periherm.* c. 10, 19b19 sq. 例えば copula として sum (乃至 est) が使われる時は tertium adiacens であり、述語として、つまり secundum se に praedicare される時が secundum adiacens である。 Socrates est albus という時と Socrates est という時の区別である。
- (12) Avicenna, *Met.*, VIII c. 4. アヴィケンナの anitas については考察を要するが、参考となるものに M. T. D'Alverny, Anniyya-Anitas, in *Mélanges offerts à E. Gilson*, 1959 がある。差当ってはエックハルトが言うように(本論文第6節)物事の quid est, 即ち quiditas を問うのに対して、物事の an est を問う場合に、これをその anitas を問うのだという風に解しておく。
- (13) LW II n. 16-17.
- (14) LW V, *Quaestiones Parisienses*, quaest. 1. n. 9 では puritas essendi という言葉が見られる。

- (15) LW II n. 16. ここでは bulliens (bullitio) や liquescens という言葉が見られるが、これらについては V. Lossky, *Théologie négative et connaissance chez M. Eckhart*. 1973, pp. 116-117 の註72及び73を参照。
- (16) Cf. Proclus, *Elementatio theol.*, prop. 83 in com.; *De causis*, prop. 7 in com., prop. 15.
- (17) これは智者の言葉として語られている。Cf. *Liber XXIV philosophorum*, prop. 1; Alanus de Insulis, *Theol. Regulae*, Reg. 3; Thomas, *S. Th.* I q. 32 a. 1 obi. 1.
- (18) LW II n. 16: Hinc est quod emanatio personarum in divinis ratio est et praevia creationis.
- (19) LW II n. 17.
- (20) *De trinitate*, c. 3 n. 4 sq.
- (21) LW II n. 18.
- (22) Priscianus, *ibid.*, XVII c. 3 n. 24.
- (23) 本論文註(6)参照。
- (24) LW II n. 19-21.
- (25) *Dux neutrorum*, I, c. 62.
- (26) ヘブライ語で神の名を表わすのに Y・H・W・H の四文字をもってこれに当てる(その正確な発音は不明)。この四文字がテトラグラマトンであり、後にユダヤ神秘思想において重要な意味を持つ。
- (27) LW II n. 20.
- (28) *De causis*, prop. 21: Primum enim est dives per se.
- (29) Maimonides, *Dux neutrorum*, I, c. 62.
- (30) LW II n. 21.
- (31) アヴィケンナも彼の『形而上学』第8巻1章においてそう言っている。
- (32) LW II n. 21: Egere igitur nihilo summae perfectionis est, plenissimum et purissimum esse est. Et si plenum esse est, igitur et vivere est et sapere est, et sic de omni alia perfectione.
- (33) 『コリント後書』第3章5節。non quod sufficientes simus cogitare aliquid a nobis, quasi ex bobis, sed sufficientia nostra ex Deo est;
- (34) 第1章3節。sine ipso factum est nihil quod factum est.
- (35) *De consideratione*, c. 6 n. 3.
- (36) LW V, quaest. 1 n. 4: Esse ergo habet primo rationem creabilis, ...; quaest. 4 n. 7: sed de natura superioris est influere et dare esse, et de natura inferioris est quaerere esse.; LW I, n. 4: Creatio autem est collatio esse.
- (37) 本論文註(36)参照。